

野 菜

実 況…(27年6月20日現在)

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

福井、若狭地区は、6月上旬から摘心開始となっており、2～3段果房が収穫中である。南越地区では、5月27日から選果場稼働による出荷が行われている。

灰色かび病が微発、うどんこ病が微～中発、コナジラミ類が微発である。

抑制栽培は、坂井北部丘陵地で6月4日から播種開始となっている。

(2) ミディトマト

福井、坂井地区は、3段果房を収穫中である。南越地区では、10段果房が開花期で1～2段果房を収穫中である。若狭地区では、7～9段果房が開花期で1段果房を収穫開始している。4月中旬定植の奥越地区では、6～7段果房が開花期で1段果房が収穫間際となっている。

葉かび病が少発、サビダニが微発、アザミウマ類が少発である。

若狭地区の昨年7月下旬定植の促成長期どり栽培は、継続中出荷中で6月末に終了予定である。昨年に比べ収穫量は2～3割増加の見込みである。

灰色かび病が微発、葉かび病が中発である。

抑制栽培は、坂井地区で6月11日から、福井地区では6月19日から定植開始となっている。

(3) キュウリ

2月下旬定植の若狭地区および3月中旬定植の福井、丹生地区は継続収穫中である。

うどんこ病が少～中発、灰色かびが少発、アザミウマ類が中発である。

(4) ハウススイカ

坂井北部丘陵地及び三里浜砂丘地は、6月5日から収穫開始（昨年より3日早い）となり、収穫盛期は6月中旬となっている。

ハダニ類が少発である。

(5) メロン

プリンスメロンは、6月上旬で出荷終了した。アールスメロンは、坂井北部丘陵地では6月20日前後から出荷開始の予定である。三里砂丘地では、7月初旬から収穫開始の予定である。マルセイユメロンは、坂井北部丘陵地で6月1日から、三里浜砂丘地では6月7日から収穫開始となっている。南越地区では、好天に恵まれ生育は順調、6月9日から収穫開始となっている。坂井北部丘陵地のアンデスメロンは6月20日から出荷となっている。

つる枯れ病が一部中発、ハダニ類、アブラムシ類が少発、アザミウマ類が一部中発である。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のハウレンソウは、5月上旬播種を30～40日で収穫中である。

萎凋病が中発である。

(2) アスパラガス

福井地区は、26年定植が4～5本の立茎終了で草丈150～160cmとなっている。軟腐病一部少発、茎腐病が微発である。

2 露地野菜

果菜類

(1) ピーマン

4月下旬定植の丹生地区は、草丈53cm、7段開花、3～5番果着果で収穫中となっている。5月中旬定植の福井市清水地区では、草丈34～38cm、4段開花となっている。白絹病、疫病、アブラムシ類が微発である。

(2) キュウリ

若狭地区の5月下旬定植の加工用キュウリは、7月上旬から収穫開始の予定である。丹生地区の5月末定植では、草丈130cm、主枝が16～17節となっている。うどんこ病が微発である。

(3) スイカ

4月中旬に定植した坂井北部丘陵地は、5月末～6月上旬が開花期の早いもので球径20cm程度になっている。4月上旬に定植した三里浜砂丘地では、5月25日～末が開花盛期となり平年より数日早くなった。収穫時期は7月初旬頃の予定である。南越地区では、一部、少雨傾向による生育遅れが見られる。

炭疽病、アザミウマ類が微発である。

(4) カボチャ

坂井北部丘陵地の4月上旬定植は、6月末から収穫開始予定である。

(5) ナス

4月中旬定植した奥越地区は、草丈80～90cmで4～5番果開花、2～3番果を収穫中である。

うどんこ病、灰色かび病が少発、アザミウマ類、カメムシ類、ネキリムシ類が少発である。

(6) 一寸ソラマメ

坂井地区は、5月20日から収穫開始で収穫中である。若狭地区では、5月16日から収穫開始となり6月4日で終了した。高温少雨の影響で収穫量は平年より少ない。

(7) スイートコーン

永平寺町は、4月25日定植が6月6日雌花開花期で6月末から収穫の予定である。福井市清水地区では、4月末定植が草丈100～137cmとなっている。7月1日から収穫開始の予定である。

アブラムシ類、アワノメイガが微発である。

葉菜類

(1) ブロッコリー

福井地区は3月末定植が6月5日から収穫開始となっている。南越地区では、3月下旬定植が5月26日から順次収穫されており継続出荷中である。若狭地区では、4月上旬定植が例年より2週間遅れの6月12日収穫開始となった。

アブラムシ類が少発である。

(2) ネギ

奥越地区の越冬ネギの収穫は、6月12日で終了した。

秋冬どりは、福井地区の3月末定植が、地上部長50cm、葉鞘径が15mmとなってい

る。奥越地区の4月上旬定植が、地上部長55～65cm、葉鞘径が15～17mmとなっている。坂井地区の4月中旬定植が、地上部長40～60cm、葉鞘径11～14mmとなっている。若狭、南越地区の4月下旬定植が地上部長44～49cm、葉鞘径9～10mmとなっている。丹生地区では、5月中下旬定植が地上部長29cmとなっている。生育は、昨年と比べ全体的に若干遅れ気味となっている。

萎凋病が小発、さび病が微～少発、ネギコガが微発、ネキリムシ類が少発、アザミウマ類が少～中発、ハモグリバエ類が少～中発である。

(3) キャベツ

秋まき初夏どりは、坂井北部丘陵地では5月20日から収穫開始で継続出荷中である。坂井地区の水田作では、6月17日で収穫終了した。

(4) シソ

福井市木田地区は、6月22日から出荷開始の予定である。

根菜類

(1) タマネギ

永平寺町は、5月末から収穫開始となり6月14日で終了した。平年より1週間早い。L中心で小玉傾向。坂井地区では、6月15日から収穫開始となっている。灰色かび病が少発である。

(2) ニンジン

三里浜砂丘地は、3月下旬播種が6月22日から収穫開始された。

(3) ラッキョウ

一年掘りは、収穫終了した。三年子は、6月7日から収穫開始で収穫中である。

(4) カンショ

定植作業は、坂井北部丘陵地では6月下旬で終了予定である。丹生地区では4月26日～5月26日間に4回に分けて行われた。

ナカジロシタバが局微発である。

(5) サトイモ

奥越地区では、主茎長30～40cmで本葉4～5枚展開中となっており、ほぼ平年並みの生育である。ハダニ類、アブラムシ類、セスジスズメが少発である。

(6) ニンニク

永平寺町は、6月上旬から収穫開始となり6月18日でほぼ終了した。平年より1週間早い。L中心で小玉傾向。乾燥終了後6月20日から出荷予定している。

さび病が多発である。

(7) ショウガ

福井地区では、4月下旬～6月上旬にかけて定植が行われ、6月8日から発芽開始となっている。

対 策

梅雨時期は、降雨による湿害を防ぐため、ハウス周辺部の排水対策を徹底するとともに、換気と誘引整枝、摘葉等により風通しを良くして、病害の発生予防と拡散防止に努める。なお、梅雨明け以降は、急激に晴れて暑い日が多くなり、時として猛暑日が続く場合があるので、盛夏期に備えて遮光ネット等を準備する等の高温障害対策や、露地野菜における少雨干ばつ対策についてもかん水器具点検や準備等を事前に行う。

今から、病害虫発生が多くなる季節となり、農薬による防除回数も増えてくるが、耕種

的防除も取り入れながら農薬の適正使用に努める。

1 施設野菜

果菜類

(1) 抑制果菜類の育苗

育苗は通風の良い所にハウスを設置し、ウイルス病予防のためハウス開口部には寒冷紗で被覆する。また、徒長防止のため、保水性の良い床土を用いかん水量が過剰にならないように留意する。更に、換気を十分に行うとともに、苗どうしが過密にならないように生育に合わせて鉢間隔を広くする等健全苗の育成に努める。

(2) トマト

換気を十分に行うことでハウス内気温の上昇を防ぎ、更に、摘葉とあわせて風通しを良くすることで、葉かび病、灰色かび病、うどんこ病等の発生を抑制せざる。ただし、病害の発生を確認した場合には、早期防除に努める。なお、突然の豪雨による裂果を防止するため、ハウス周囲の排水溝の整備をしておく。

抑制トマトの施肥は、前作の肥料残効を考慮(必要に応じて土壌分析)して、適正な施肥量を決定する。過剰な窒素は、過繁茂や心止まりの原因になるので注意する。

トマト黄化葉巻病の発生防止と蔓延を防ぐため、媒介昆虫であるタバココナジラミの発生防止策を徹底する。前作終了直後の施設内の蒸し込み、健全苗の定植、防虫ネットの活用、農薬粒剤の施用、発病株の早期除去、更に、黄色粘着板等を活用してのタバココナジラミの発生予察などを活用しながら的確な防除を行う。

(3) キュウリ

草勢が低下してくると曲がり果や尻細り果等が多くなるので、着果量を考慮しながら追肥、かん水を行う。また、病害予防のため、親づるの摘葉、子づるや孫づるの整枝等を行って日当たりや通風を良くするとともに、ハウス換気を十分して灰色かび病やべと病の発生抑制に努める。なお、摘葉は1度に多くの葉を摘除すると草勢を低下させるので、1回当たり2枚程度とする。

(4) ミディトマト

大雨による糖度低下や裂果を防ぐため、ハウス周囲の排水溝を整備してハウス内への侵水を防ぐ。ただし、過度な乾燥状態が続くと、草勢の低下、上部茎葉での針葉の発生を招き、落花や収量品質の低下につながるため、土壌水分(畦内での土の湿り具合)を確認しながら適宜かん水を行う。

また、収穫時の軟化果の発生を防ぐため、ハウス換気(肩換気など)や遮光を行って果実温を下げるるとともに、適期収穫に努める。さらに、葉かび病、オンシツコナジラミ、ミカンキイロアザミウマ等の防除を徹底する。

抑制栽培では、高温期間が定植時期となるため、定植前に十分かん水し土壌水分を確保するとともに、定植時には、適切な遮光を行い植物体温を低下させ活着促進を図る。定植苗の活着遅れや極端な萎れは、その後の落花や着果不良、上段果房の花数減少の原因となるので留意する。特に、プラグ苗による定植は、通常のかん水では、上根中心の草姿となりやすいため、十分に活着するまでは、根が地下深くに行き渡るように、手かん水等でこまめなかん水管理を行う。

トマト黄化葉巻病対策については、「トマト」の対応を参考とする。

(5) 抑制ネットメロン

定植苗は、活着の促進や高温期間の草勢確保のため、2.5葉期程度の若苗を植え付ける。なお、定植は、高温による定植時の萎れや活着不良を防ぐため、温度の下がった夕方か曇天日に行う。さらに、ウイルス病予防のため、ハウスの出入り口やサイドに寒冷

紗を張って、アブラムシ類、アザミウマ類の侵入を防ぐ。

(6) イチゴ

ランナーが出始めたならランナーが込み合わないよう配置する。ある程度、必要苗数が確保できた時点でランナーの摘心を行う。ポットによる苗づくりは、7月下旬から8月上旬にかけて、9 cmのポリポットに市販の培土を詰めて苗受けとし配置、必要苗数(目安 850 株/a)が確保できた時点でランナーを切り離す。その後、苗が徒長しないよう 15 cm間隔で苗鉢を広げながら育苗する。

ダニやアブラムシ、うどんこ病、炭疽病等は栽培期間に発生すると壊滅的な被害となることが多い。病害の発生の有無に関係なく育苗期間中に予防散布を実施する。なお予防散布にあたっては、薬剤による抵抗性が出ないよう留意する。

葉菜類

(1) ホウレンソウ

高温期に播種する場合、立枯病や萎凋病等の病害発生が多くなる。このことから、必ず土壌消毒を行う。かん水方法は、播種時に十分かん水し、その後、4葉期頃まではできるだけかん水を控える。なお、土壌の高温や乾燥によって発芽が不安定になりやすいので、黒寒冷紗で遮光を行って地温を下げ、土壌水分を安定させる。生育は、高温によって徒長しやすくなるため薄播きをするとともに、生育が早く収穫適期日数が短くなるので段播きにより調整する。

(2) コマツナ

ハウス出入り口やサイドに寒冷紗を張り、コナガ、アオムシ等の侵入を防ぐ。また、ホウレンソウと同様に薄播き、段播きを徹底する。キスジノミハムシの侵入防止のため、0.8mm目合いの防虫ネットを使用する。

2 露地野菜

果菜類

(1) スイカ

圃場排水を良くして根の衰弱を防ぐとともに、降雨が続いた後や大雨の後につる枯病、炭疽病等の病害が蔓延する傾向が見られる。降雨時は、晴れ間を見て必ず予防散布を徹底するとともに健全な葉を確保する。また、果実が 10 cm程度の大きさになった頃、玉直しをしてスイカシートを敷く。なお、梅雨明け以降に、草勢低下が見られる場合は、直射による日焼け果防止のため果実にわら等で日除けをする。

(2) ナス、ピーマン

圃場排水を良くして根の衰弱を防ぐとともに、草勢を維持しつつ、品質の良い果実を長期間収穫するためには、肥効が途切れないように収穫量を見ながらこまめに追肥を行う。梅雨明け後は、敷きわらを行って畦の水分保持と地温低下を凶るとともに、晴天が続く場合には、かん水により畦間(通路)が常に湿っている程度の土壌水分を確保して草勢の維持確保を図る。ただし、生育が進むにつれて枝葉が込み合ってくるので、誘引、整枝により草勢を安定化させ、下葉の摘葉により風通しを良くする。なお、ヨトウムシ、アブラムシ等の害虫の発生が見られた場合は、早期防除に徹する。

草勢の判断基準として、ナスでは長花柱花と中花柱花が混在している。果実のヘタ下部が2~3段に着色している。開花上下の茎の長さがほぼ同じである。このような状態であれば、ほぼ適正な草勢であると判断できる。

(3) キュウリ

収穫量の増加に合った追肥を適宜行う。また、過度な摘葉を避けて草勢低下を防ぐ。

ただし、込み合ったところは草勢を見ながら適宜摘葉を行い、風通しを良くするとともに、べと病等の予防散布に努める。なお、曲がり果、尻細り果、花落ち部の丸くなった果実の増加が見られるときは、草勢が低下してきたと判断できるので追肥時期が遅れないよう注意する。

葉菜類

(1) ネギ

ネギの難病害である軟腐病、白絹病は夏期の高温、多湿条件で発生が助長される。このため、降水量が多く土壌湿度が高くなると多発しやすくなり、特に、乾燥状態が続いた後に過湿状態が続いた場合激増する。更に、排水不良の圃場では多発しやすいため、圃場排水を良くするとともに、水田圃場では早めに粒剤等を散布し病害発生予防に努める。定植時期や生育状況を見て、追肥時期や土寄せ時期が遅れないように管理作業を行うこと。

(2) キャベツ、ブロッコリーの育苗

ペーパーポット（72穴）やセルトレイ（128穴：高温時は72穴）を利用し、市販培土を用いて播種を行う。なお、播種から20～25日で2.0～2.5葉期の苗に仕上がるため、定植時期を考慮して播種日を決める。育苗場所は高温による徒長防止のため、通風の良い比較的涼しいところを選ぶ。できれば、遮光管理ができるハウスまたは寒冷紗のトンネルにより育苗する。播種、かん水後は、発芽を揃えるため発芽までは床土が乾かないように新聞紙等をべたがけしておき、7割程度の発芽を確認した日の夕方に新聞紙等を取り除く。なお、高温時の苗の徒長を防ぐためには、過剰な灌水を避けることと、使用する培土はやや肥料分の少ないものを選び、育苗後半に1～2回追肥して仕上げるようにする。

いも類

(1) サトイモ

7月上旬に追肥、土寄せを行う。土寄せ時期が遅れると根を傷め、生育を停滞させることになるので遅れないようにする。この時期は、孫いもの着生期となるため土壌水分が必要な時期となる。梅雨明け後は、盛夏時期となり特に圃場が乾きやすくなるので、圃場の乾燥状態を見て適宜に畦間かん水を行う。ただし、日中は落水し、湛水状態にならないように管理する。